

ガラスノ遺跡

中津市大字合馬字ガラスノ190-1 所在

1984

大分東芝ハウジング株式会社
中津市教育委員会

例

言

- 1) 本書は大分東芝ハウジング株式会社（代表取締役・飯島明博）による宅地造成工事に伴い実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
- 2) 発掘調査は大分東芝ハウジング株式会社の委託をうけ、大分県文化課の指導のもと、中津市教育委員会が主体となり、昭和58年11月28日から昭和59年2月10日まで実施した。
- 3) 調査期間中には県文化課、渋谷忠章主任ほか文化課諸氏に御指導、御助言をいただいた。また村上久和氏には「付論」の執筆をお願いした。
- 4) 骨蔵器については佐賀県立九州陶磁文化館、大橋康二氏に、また火葬人骨については九州大学医学部第2解剖学教室助手、田中良之氏にそれぞれ御助言をいただいた。
- 5) 本書の編集は調査担当である田中布由彦（中津市教育委員会市民文化センター…文化係主事）と栗焼恵児（同嘱託）が協議して行ない、執筆・整図は栗焼が担当した。また遺物整理については、中津市文化財資料室の我毛温子、秋吉三和子、長岡かおりの手をわざわせた。
- 6) 調査にあたっては上記の方々の他、合馬地区長、川底正弘氏をはじめ、地元の方々の御協力を得た。
- 7) 表紙の題字は市民文化センター館長、阿知波豊明の揮毫による。
- 8) 調査員の構成は次の通りである。

調査主体／中津市教育委員会

調査責任者／江藤 覚 中津市教育委員会教育長

調査事務／袖木辰巳 大分東芝ハウジング株式会社

　　大木代一 中津市教育委員会社会教育課長（前任）

　　阿知波 豊明 中津市教育委員会市民文化センター館長

　　原田 知宣 中津市教育委員会社会教育課長（前任）

　　小野 守影 中津市教育委員会市民文化センター文化係長

調査担当／田中 布由彦 中津市教育委員会市民文化センター文化係主事

　　栗焼 恵児 中津市教育委員会市民文化センター文化係嘱託

序 文

当社では、現在発展著しい中核都市・中津市の住宅需要に対応するため、生活環境、自然環境に恵まれた合馬地区に団地の開発を進め、昨年の12月に造成工事に着手いたしました。

この造成工事に先立ち、埋蔵文化財の事前発掘調査を中津市教育委員会にお願いしましたところ、当該団地の計画区域内に一部遺跡のあることがわかり、当社としてはこの遺跡について記録として保存する必要性を感じ、県および市教育委員会の御指導、御協力のもとに発掘調査を実施いたしました。

埋蔵文化財は歴史や文化を理解するうえで欠くことのできない貴重な遺産であり、その保存は地方文化の形成に大きな役割を果すとともに、我々に課せられた責務であると考えます。

宅地開発事業を進めるうえで我々業者にとって工期の遅延、工費の増高等の課題も残りますが今では中津市における文化財行政の推進に寄与できた事を誇りに考えております。

この度の調査報告書の発刊を心からお慶び申し上げますとともに、本書のご活用を大いに仰ぎ文化財保護の一助となれば幸甚であります。

終りに本調査にあたり、終始熱心に取り組んでいただいた中津市教育委員会担当職員の方々、並びに御指導いただいた大分県文化課の各位に対し深甚の謝意を表する次第であります。

昭和59年8月31日

大分東芝ハウジング株式会社

代表取締役 鮫 島 明 博

はじめに

中津市の西端、福岡県との県境を流れる山国川は遠く英彦山に端を発し、途中名勝耶馬渓を形成して周防灘へと注がれる。この山国川下流域に形成された中津平野は、県北最大の平野として下毛原台地を中心とし、古くから人々の営みがなされてきた。特に今秋は郷土の先覚者である福沢諭吉の新札登場にともない全国的に注目を集めつつある。また大分県では現在、県政の最重点課題として県北テクノポリス構想とこれにともなう交通体系の整備が急がれており、中津市でもこれらの中核をなすものとして日本電気大分工場や国道10号線中津バイパスの建設が急ピッチで進められている。さらに恵まれた生活環境と相まって北九州の通勤圏としての見直しがなされ、近年にない開発ブームがおこりつつある。

これら開発行為は地域文化の発展に大きな役割を果すものであるが、その反面我々の祖先が築いてきた文化（特に埋蔵文化財）に対しては危機的な状況を与えるものである。したがって開発行為に伴う緊急発掘調査も増加する傾向にあり、今回のガラスノ遺跡の調査もその一例である。

1. 調査に至る経過

ガラスノ遺跡は大分県中津市大字合馬字ガラスノ190-1番地他に所在する。周辺には弥生時代から古墳時代に至る広範囲な分布をもつ全徳遺跡をはじめ、いくつかの周知遺跡が存在し、以前から遺跡の存在が予想されていた地点である。

この様な状況の中、昭和58年3月4日付で國土法第33条に係る届出があり、中津市教育委員会（以下市教委という）では発掘調査をするものとして意見を添え回答を行った。これに対して同年10月4日、大分東芝ハウジング株式会社（以下施行者という）より文化財保護法第57条の2第1項による届出が市教委宛に提出されたため、市教委としては県文化課の指導のもと試掘調査を行い遺跡の有無を確認した後に本調査について再度施工者と協議することとした。このため同年11月9日に県文化課、市教委、施行者立ち合いのもとに重機による試掘調査を実施した結果、火葬墓2基と集石を確認したため、この地点を中心として約2600m²に限定して本調査を行うこととし、施行者と最終的な協議を行った。そして調査は市教委が主体となり、費用は施行者が負担するものとし、同年12月11日より昭和59年1月31日までの予定で本調査を行なうことで合意に達した。しかし、今年は例年にない嚴冬に見舞われたため調査は思うように進まず、調査が終了したのは2月10日であった。

2. 遺跡の位置と歴史的環境



写真1 ガラヌノ遺跡 航空写真

ガラヌノ遺跡は中津市の北部、白見川と伊呂波川に挟まれた標高約10mの低丘陵上に存在する。現在の海岸線からは直線で1km程度であり周防灘を一望できる海岸部に位置している。付近には全徳遺跡（弥生時代～古墳時代）をはじめ合馬遺跡（弥生時代～古墳時代）、舞手橋東段上遺跡（弥生時代・住居址？）などが存在する。また“まばろしの前方後円墳”と言われる亀山古墳（通称亀塚）が存在していたのもこの付近であるが、現在では何ら形跡を残さないばかりか正確な位置すら確かでない。

現在中津市では南部の丘陵地帯（下毛原台地）を中心として78ヶ所に及ぶ遺跡が確認されている。中でも国道10号線中津バイパス道路建設に伴い調査されている上ノ原横穴墓群は、日本最古の横穴墓の発見と、緻密な調査方法によって大きな成果をあげ注目されている。（註1）また同じくバイパス道路関係と、日本電機大分工場建設に伴い行なわれた伊藤田窯跡群の調査は、九州でも有数の古代窯跡群の解明に大きな役割を果しつつある。（註2）

これら市内を含む中津地方の先史・古代遺跡について概観すれば、旧石器時代においては人々の足跡はほとんど残されておらず、わずかに柏原地区と洞ノ上地区でその断片をみるにすぎない。



図1 遺跡の位置

縄文時代早期～中期にかけても同様であるが、近郷の下毛郡本耶馬溪町では松洞穴が知られ、当時の埋葬儀礼や生活環境を知る上で大きな成果を上げている。^(註4) 縄文時代後期～晩期になると、植野貝塚、入垣貝塚、棒垣遺跡をはじめいくつかの遺跡が認められるようになり、山国川を挟んだ筑上郡新吉富村でも垂水遺跡などが知られる。植野貝塚は昭和30年に調査が行なわれており、有望な貝層が確認されている。また棒垣遺跡も昭和55年に調査が行なわれ、県下では数少ない縄文時代住居址が検出され注目された。

この棒垣遺跡と近接して存在するのが入垣貝塚であ

り、時期的には大差ないものと考えられている。これら両遺跡は、貝塚遺跡の本来あるべきパターンで存在しており、県下では唯一の例である。また山国川の自然堤防上に立地する高畠遺跡は土偶の出土で以前から知られており、後期後半の時期が考えられる。この高畠遺跡を除く3遺跡はいずれも後期前半が考えられ、瀬戸内地域の影響を強く残しており、東九州地域のそれとはやや異った様相を示している。

弥生時代については中期～後期にかけていくつかの遺跡が知られるが、前期については若干の表探資料が認められるにすぎない。^(註5) 中期は高瀬地区上万田遺跡、伊藤田城山墓跡群^{L調査区}包含層などがある。上万田遺跡では昭和45年に中津南高校郷土部によって簡単な調査がなされているが、調査期間等十分でなく不明な点が多い。しかし、カメ棺、石蓋土壙をはじめ住居址など相当数の遺構が存在していたと思われるその破壊が悔まれる。また、伊藤田城山墓跡群^{L調査区}では、墓跡の調査に伴い良好な包含層が確認されている。ここでは多量の土器片とともに石包丁が検出されており、付近に集落の存在を予想させるものである。これら出土した上墓群はいずれも北部九州の珠玖式土器文化圏の影響を強く受けており、中津地方を含めた豊前地方の一般的なあり方と符合するものである。

古墳時代前期には前述の上万田遺跡で住居址群が認められている。弥生時代のそれとの関係がいかなるものかは明確にできないが、ある程度の範囲の違いが推定できる。土器群については畿内布留式の影響が強く、その特徴をよく残しており、時期的に4世紀中葉から4世紀後半に近いものが考えられる。この上万田遺跡に続くものとして勘助野地1号方形周溝墓がある。これは組合せ式石棺、石蓋土壙、木棺の3基からなる主体部を有し、一辺約20mの規模をもつ。5世紀中頃の成立と考えられ、在地の首長クラスの墓であろうか。

この後5世紀後半になると早くも上ノ原横穴墓群第1期の横穴墓が構築されるようになる。これは本地方で数少ない前期の墓制を伝えるもので、該期の高塚古墳が少ない状況の中で注目され



図2 追跡分布図

るものである。上ノ原横穴墓群はこの後6世紀後半まで都合Ⅲ期にわたって造墓が行なわれ、横穴墓の変遷を知る上で重要な役割を果している。この他、横穴墓は6世紀後半を中心に数多く構築されているが、長大な墓道を有するものは上ノ原例のみで、この地は容結凝灰岩に直接造られたものが多い。これら横穴墓に対して高塚古墳は量的に極めて少なく、相原古墳、城山古墳群などが知られるにすぎない。城山古墳群は昭和28年に調査がなされ、破壊されたものを含め28基が確認されている。このうち19号と呼ばれる比較的保存状態のよいものが調査され、金環や馬具類（杏葉、銅貝、留金具、鏡板）が出土しており、6世紀後半の所産と考えられる。これら墓制に伴うものとは別に、伊藤田地区では前出の伊藤田窯跡群が存在する。現在までにバイパス工事、^(註10)工場用地造成にともない8基が調査され、6世紀後半から8世紀に至る窯跡が確認されている。

No	遺跡名	種別	所在地	No	遺跡名	種別	所在地
1	鍋島古墳	古墳	今津半鍋島	40	下池永遺跡	散布地	池永
2	鍋島遺跡	散布地	〃	41	全徳遺跡	散布地	合馬
3	若瀬古墳	古墳	今津半停車場	42	相原廃寺	寺院	相原
4	植野貝塚	貝塚	植野	43	三口遺跡	包含地	上ノ原
5	植野伽藍遺跡	散布地	〃	44	上万田遺跡	包含地	万田
6	植野古城遺跡	散布地	〃	45	高瀬遺跡	包含地	高瀬
7	野依古墳	古墳	野依	46	高畠遺跡	包含地	〃
8	松尾遺跡	散布地	〃	47	豊田小学校遺跡	包含地	豊田町
9	是則塚	古墳	〃	48	龜山古墳(消滅)	古墳	合馬
10	黒川古墳	古墳	伊藤田半黒川	49	沖代条里遺構	条里	沖代町
11	大池窯跡群	窯跡	野依	50	野依条里遺構	条里	野依
12	瓦ヶ迫窯跡群	窯跡	〃	51	大悟法条里遺構	条里	大悟法
13	野依追ノ谷遺跡	散布地	〃	52	大池窯跡	窯跡	野依
14	隅ヶ迫窯跡群	窯跡	〃	53	草場遺跡	散布地	伊藤田半草場
15	穂谷窯跡群	窯跡	〃	54	草場窯跡	窯跡	伊藤田半草場
16	野依烽火台	烽火台	〃	55	城山窯跡群	窯跡	伊藤田半草場
17	ゴング遺跡	散布地	〃	56	大谷窯跡群	窯跡	伊藤田半洞/上
18	大谷窯跡群	窯跡	〃	57	才木遺跡	散布地	〃
19	城山横穴群	横穴	伊藤田半草場	58	洞ノ上窯跡	窯跡	〃
20	城山古墳群	古墳	〃	59	入堀貝塚	貝塚	鶴島
21	洞ノ上横穴群	横穴	伊藤田半洞/上	60	棒垣遺跡	包含地	〃
22	城土遺跡	散布地	伊藤田半城土	61	福島地下式横穴	横穴	〃
23	福島遺跡	包含地	福島	62	北原第3遺跡	散布地	北原
24	三保遺跡	包含地	〃	63	大悟法遺跡	散布地	大悟法
25	田丸城跡	城跡	〃	64	中原遺跡	散布地	中原
26	長久寺貝塚	貝塚	〃	65	上池永遺跡	散布地	池永
27	北原遺跡	散布地	北原	66	西永添遺跡	散布地	永添
28	北原第2遺跡	散布地	〃	67	勘助野地遺跡	墳墓	上ノ原
29	土木貝塚	貝塚	〃	68	上ノ原横穴群	横穴	〃
30	定留貝塚	貝塚	定留	69	沖代小学校遺跡	水田跡?	沖代町
31	黒水遺跡	散布地	加来半黒水	70	合馬遺跡	散布地	合馬
32	上ノ原遺跡	包含地	上ノ原	71	ガラヌノ遺跡	古墳・墓跡	合馬半ガラヌノ
33	葦旗邱古墳	古墳	〃	72	舞手橋東段上遺跡	住居址?	田尻
34	相原古墳1、2号	古墳	〃	73	是能遺跡	散布地	定留半是能
35	坂手懸横穴群	横穴	〃	74	和間貝塚	貝塚	定留半和間
36	坂手前横穴	横穴	〃	75	諸田遺跡	散布地	今津半諸田
37	台遺跡	散布地	〃	76	中津城跡	城跡	二ノ丁
38	永添中園遺跡	包含地	永添	77	停車場遺跡	散布地	今津半停車場
39	桃屋遺跡	散布地	〃	78	植野遺跡	散布地	植野

表1 中津市内遺跡地名表 (S59.8.31現在)

^(注12) 中でも躊躇ヶ迫窯跡は瓦陶兼業窯として築上郡大平村中桑野遺跡との関連が興味深い。^(注13)

この他白鳳期には、百濟系素引軒丸瓦を用いた相原庵寺（通称百濟寺）が出現するが、未調査であるため、伽藍配置など推定の域を出ない。^(注14)

（注1）昭和56年以來県文化課により調査が行なわれており、現在継続中である。

（注2）村上久和他「上ノ原横穴群II、伊藤田古窯跡群I」大分県教育委員会 1983

村上久和・小林昭彦他「上ノ原横穴群III、伊藤田古窯跡群II」大分県教育委員会 1984

（注3）賀川光夫他「傍洞穴発掘調査概報」考古学論叢 4 1978

（注4）賀川光夫「大分県中津市植野貝塚調査報告書」中津市教育委員会 1957

（注5）昭和55年県教育委員会により調査され、現在整理中である。

（注6）清水宗昭・坂本嘉弘他「石原貝塚、西和田貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会 1979

（注7）吉田真介氏（中津市文化財調査員）の御教授による。

（注8）中津南高校脚上研究会「上方田遺跡発掘調査報告書」中津市教育委員会 1972

（注9）村上久和他「上ノ原遺跡群I」大分県教育委員会 1982

（注10）賀川光夫「城山古墳群」中津市教育委員会 1953

（注11）注2に同じ。伊藤田城山遺跡群については昭和58年中津市教育委員会が調査を行ない現在整理中である。

（注12）賀川光夫他「中津の歴史」中津市刊行会 1980

（注13）須恵貝塚については近年本地域において往々と/or;あり、村上久和氏によれば、これら両遺跡間には供給関係の存在が予想されるといわれる。

（注14）注12に同じ。

3. 調査の概要

調査は昭和58年11月9日に実施した試掘調査（対象13,141m²）の結果をもとに、約2,600m²を対象とした本調査区を設定して行った。この結果、調査区内より古墳1基、墓跡7基、集石遺構4基を確認した。遺構は全て丘陵最上部の標高10m前後で集中して検出されたが、付近は昭和16～17年頃にかけて小倉工廠によって軍事目的による土地の搅乱が行なわれたと言われ、このため遺構はかなりの削平を受けたと考えられる。したがって古墳は墳丘、石室ともすでに失われており、墓跡も大半は上部施設が削平されて存在しなかった。

1) 古 墓 (図4)

前述したように、墳丘及び石室はすでに失なわれていた。このため検出された遺構は玄室内敷石、掘り方、腰石の抜き取り痕、及び周溝であった。敷石は最大長2.05m×巾1.7mの範囲に集中しており、腰石の抜き取り痕の内側にはほぼ納まる範囲である。腰石の掘り方は巾約0.5m前後、深さ0.15mの溝状に掘られており、奥壁にあたる部分は最大径1.4mのスリット状に掘りくぼめられていた。これらを合めた玄室の規模は、現存で最大長3.55m×巾2.55mである。石室は南に開口した横穴式石室と考えられ、敷石は人頭大の河原石を使用している。また摸造部及び、羨門と考えられる部分は木根によって搅乱されていたため明確でないが、羨道の掘り方が一部確認され最

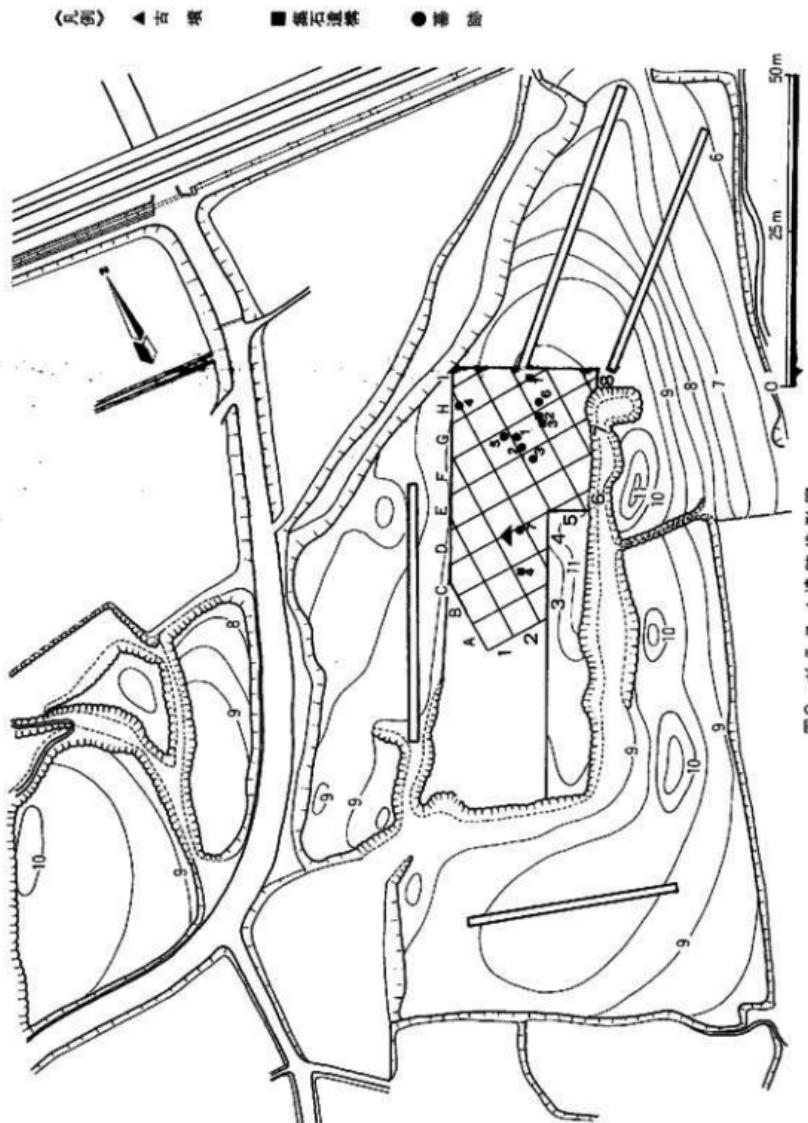


図2 ガラヌノ地形図

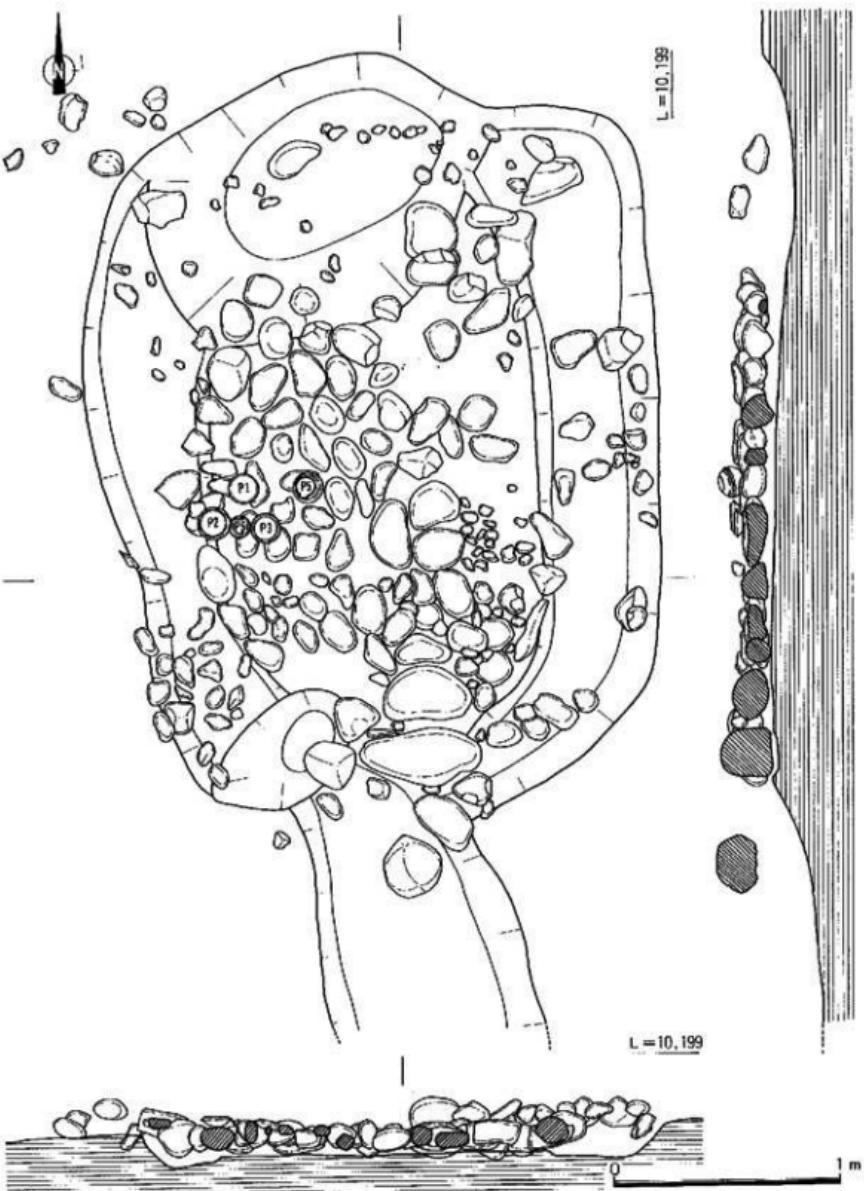


図4 古墳実測図

大巾 1.0m を測る。また周溝は全周の 5 分の 1 程度しか検出できなかったが、巾 1.5~1.7m、現地表面から最大深 0.3m が確認された。さらに周溝の直径は推定で 10m 前後と考えられ、古墳自体の規模もほぼこの程度と考えられる。この周溝内には拡大の小礫が多数流れ込んだ状態で検出され、この下位にやや暗い茶褐色土が堆積する。小標については古墳といかなる関連を有するものか明確にできなかったが、葺き石等の可能性が考えられる。以上の結果から推定される古墳の規模は直径 10m 前後の周溝を有する円墳で、玄室長 2.5m 巾 1.5m、後道部長 2m、巾 0.7m 程度であったと考えられる。遺物は中央部や左側に須恵器の环蓋 1、环身 2、脚付腕 1、脚付腕蓋 1 がまとめて検出された他、若干の須恵器片が散在していた。

2) 墓 跡 (図 5)

第 1 号墓

試掘の際骨蔵器が検出されたもので、埋納状態は不明である。ただし周囲に小礫が散在しており、集石などの上部施設が存在した可能性は高い。骨蔵器の中には火葬骨が充満していたが、副葬品等は認められなかった。

第 2 号墓

第 1 号墓とともに試掘時に骨蔵器が検出されたため、詳細は不明であるが、第 1 号墓とほぼ同様の埋納状態が考えられる。骨蔵器には同じく火葬骨が充満しており、副葬品等は認められなかったが、土壤の掘り方と思われる部分から「寛永通宝」が 3 枚検出された。いずれも古寛永である。

第 3 号墓

前述の削平により上部が失なわれていたが、下部が 3 分の 1 程度残されていた。現存する土壤の規模は 45cm × 34cm の横円形を呈し、この中に骨蔵品が納められていた。骨蔵器の大きさに対して土壤はやや大きめに掘られており、類似する第 1、2 号墓とも同様な状況が考えられる。また骨蔵器内には火葬骨が充満しており、副葬品として古銭が 1 枚伴出している。これは表面がかなり腐蝕しており銘文が明確に読みとれないが、室町時代～江戸時代初期にかけて造られた私鑄銭の「篆書照寧」(加治木系) に極似している。

第 4 号墓

調査区北端から検出され、他の墓跡とは群を異にする。53cm × 67cm、深さ 7cm の横円形のシリ鉢状の土壤を有し、これに素焼きの浅鉢を上からかぶせた状況で検出され、土器蓋土壤とも言うべき状態を呈していた。この様な埋納形態は本遺跡の墓跡としては特徴的であり、他とは一線を画するものである。なお土壤内には火葬骨、副葬品などは認められなかった。

第 5 号墓

本遺跡で検出された墓跡では唯一完全な形で検出されたものである。上部施設は人頭大よりや

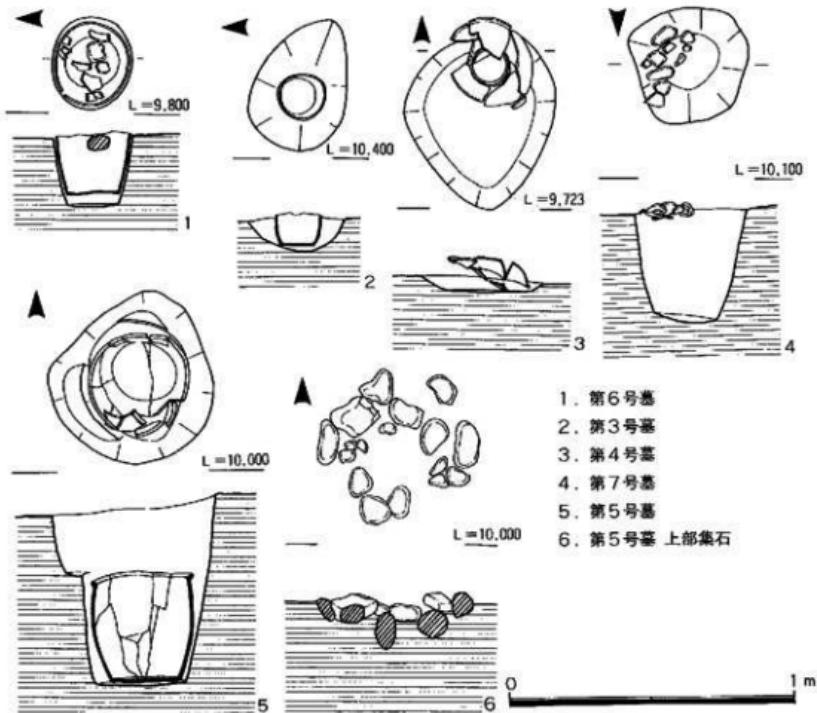


図5 墓跡実測図

や小さめの河原石を径60cm余りの円形状に配している。若干の擾乱は認められるもののほぼ原位置を保っていると考えられる。この集石の下に最大径60cm、深さ67cmを測る円形2段掘りの土壙が設けられており、この中に素焼きの深鉢が埋納されていた。火葬骨および副葬品などは検出されなかったが、この様な構造を示すものが、本遺跡の墓跡の基本的形態を示すものとして考えられる。

第6号墓

上部施設は存在しなかったが、現存する墓跡の規模は最大径27cm、深さ25cmの円形土壙の中に素焼きの骨蔵器を納めていた。土壙と骨蔵器の間には全く隙間がなく、丁度骨蔵器の大きさに合わせて土壙が掘られた状況である。骨蔵器の中には火葬骨が充満していたが、副葬品は認められなかった。しかし、骨蔵器内に落ち込んだ状態で小鍬、土器片が検出されており、この土器片により骨蔵器がほぼ完全に復元されたことからみて、第6号墓に限り上部施設の欠如は削平によるも

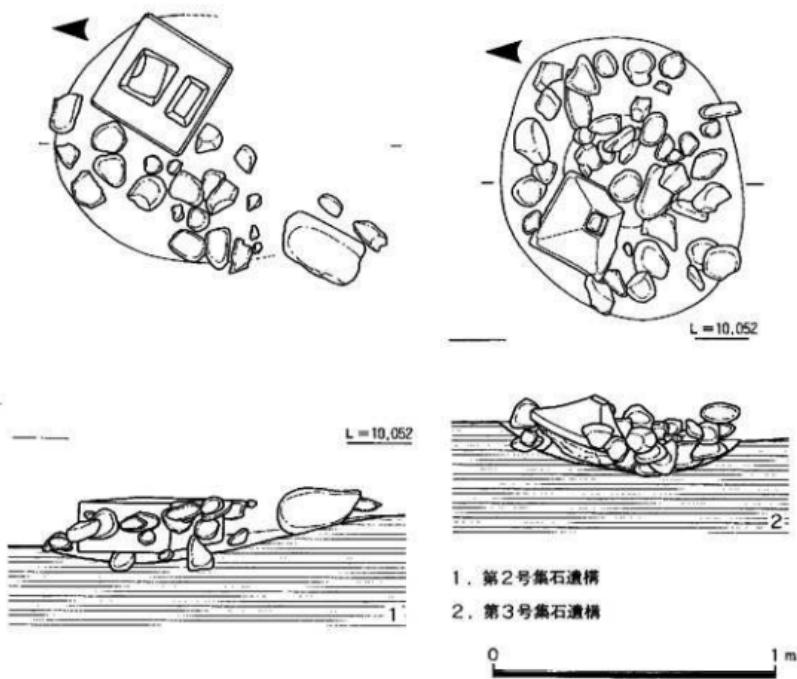


図6 集石遺構実測図

のではなく、土圧による自然陥落であると考えられる。さらに骨蔵器内に小砾が存在することは第5号墓と同様に上部施設として集石が存在した可能性を強く示しており、本遺跡における基本的埋納形態として捉えることが可能である。

第7号墓

本遺跡の墓跡の中で唯一土器を伴わないものである。上部施設として若干の拳大の河原石を配し、この下に最大径40cm、深さ40cmの円形状上槽を有する。覆土は淡茶褐色を呈し、ややふかふかした状況であり一括埋土と考えられる。土壤中からは火葬骨、副葬品などは検出されなかった。

3) 集石遺構(図6)

第1号集石遺構

調査区北側から検出された。人頭大の河原石を円形に配しているが、擾乱により原位置を保つ

ているものは少ない。遺物などは認められず、遺構も伴っていない状況で、性格などは不明と言わざるをえない。

第2号集石遺構

調査区東側から検出され、120cm×95cmの円形状の平面プランを呈する。五輪塔の地輪を中心として、西側に拡大した河原石を配している。集石の下には若干の掘り込みが認められたにすぎず墓跡あるいは祭祀遺構に係る状況は認められない。また地輪もやや傾斜して滑り込んだ状況であり、原位置を保っていない可能性もある。遺物などは伴っておらず、性格は不明である。

第3号集石遺構

85cm×90cmのほぼ円形の平面プランを有する。第2号集石遺構に近接して検出され、五輪塔の火輪を中心として東側に河原石を配している。集石下には若干のくぼみが検出されたものの遺物などは伴出していない。また出土状況からすれば、第2号集石遺構と同様に滑り込んだ状態であり、原位置を保っていない可能性がある。

この様に第2号と第3号集石遺構については出土状況や五輪塔の一部を含むことなど共通性を見い出すことが可能である。しかし、前述したようにいずれも原位置を保っていない可能性が強く、攪乱による遺構の移動が考えられる。また五輪塔はいずれも石材に相違が認められ、本来一組のものではなかったと考えられる。ただし、石塔と集石によって祭祀的意味を持つ遺構が各地で知られており、本遺構についても同様の性格を考えうるかも知れない。

第4号集石遺構

調査区のほぼ中央、古墳の南側から検出された。遺構は450cm×350cmの方形に近い平面プランを有しているが、集石としてはやや散在する傾向を示す。集石下からは何ら遺構は検出されていないが、若干の須恵器片と陶磁器片が混入していた。これは遺構がすでに攪乱されていることを示しているが、用いられている河原石が古墳とほぼ同様のものが多いことや、時期、立地などを考えると他に古墳が存在した可能性が強く、これらが破壊された際に残されたことも考えられる。いずれにせよ現状では積極的な根拠にとましいものである。

4. 遺 物

1) 須恵器（図7）

古墳敷石部分より出土したもので、4以外は全て床面直上から一括して得られたものである。

坏 蓋（図7-1）

口径13.4cm、器高3.8cmを測る。外面頂部は回転ヘラ削りによるが、他はヨコナナフ調整による。

内面は全てヨコナデ調整を行った後、さらにナデ調整を行っている。口縁付近は垂直に近い立ち上りをみせ、口縁端部は丸味を帯びる。色調は青灰色、胎土には少砂粒を若干含むが精緻である。焼成は良好で、内面口縁部近くにヘラ記号が認められる。

坏 身(図7-2)

受け部径14.4cm、内径12.5cm、立ち上り高1.3cm、器高4.4cmを測る。外面の底部中心部は回転ヘラ削りの後さらにヘラ削りを行うが、他は内、外面ともヨコナデ調整を行う。器形は底部から受け部にかけてややしり、特徴的である。立ち上りはやや内傾する。色調は淡灰色を呈し、胎土は少砂粒を含むものの精緻である。焼成は良好で、内面に1と同様のヘラ記号が認められる。

坏 身(図7-3)

受け部径13.4cm、内径11.6cm、立ち上り高0.8cm、器高3.8cmを測る。外面底部中心部は回転ヘラ削りを行い、他は内、外面ともヨコナデ調整を行う。器形は2とほぼ同様の特徴をみせ、ヘラ記号も同一である。立ち上りはやや内傾し、端部は丸味を帯びる。色調は青灰色を呈し、胎土は精緻であり、焼成は良好である。

坏 身(図7-4)

受け部径14.4cm、内径12.6cm、立ち上り高1.2cm、器高4.7cmを測る。外面の底部中心部は回転ヘラ削りの後さらにヨコ方向のヘラ削りを行う。他は内、外面とも全てヨコナデ調整を行う。器形は2と同様の特徴をもち、ヘラ記号も同一である。色調は青灰色、胎土および焼成も良好である。

脚台付有蓋椀(図7-5)

脚部は欠失している。身は口縁径8.3cm、胴部最大径(内径)11.8cm、椀部器高9.0cmを測り、器高は推定で18~20cm程であろうか。内、外面ともヨコナデ調整を行うが、底部内面はナデ調整を行う。胴部は大きく張り、山形状の凸帶3条を作り出す。色調は青灰色を呈し、胎土、焼成はともに良好である。蓋は口縁径10.2cm、受け部径7.2cm、器高4.4cmを測る。内、外面ともヨコナデ調整を行なう。受け部はやや内傾し、つまみは大井部がやや凹む。色調は青灰色を呈し、胎土焼成ともに良好である。

2) 骨蔵器(第1、2、3、6号墓)

① 第1号墓跡より検出された広口壺である。法量は内径で口縁部15.4cm、頸部16.8cm、肩部22.0cm、胴部最大径22.0cm、底部12.4cm、器高25.0cmを測る。外面はナデ調整、内面は格子状の叩きを行ない、後にナデ調整を行なうが、叩き痕を一部残す。口唇部はナデ調整を行なうが、底部は切り離し後未調整である。全体としてロクロを用いて端正な仕上げをみせている。また外面には棒状器具による刻線が8条、螺旋状にめぐらされており、最上部の刻線部分にはさらに波状の刻線文を施している。形態は底部から胴部中位にかけてやや膨みながら立ち上り、肩部にかけて

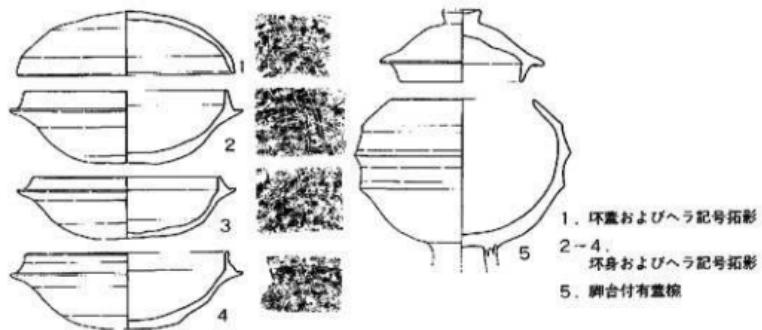


図7 古墳出土須恵器実測図および拓影 ($S=1/3$)

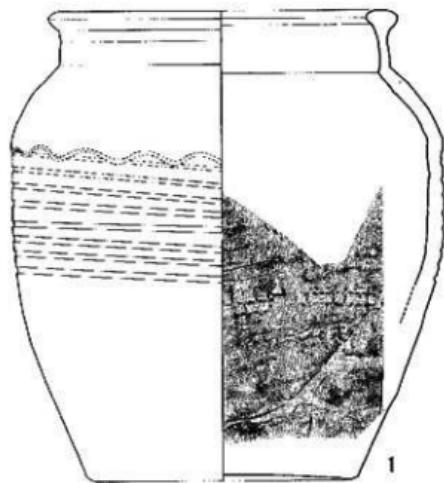


図8 第1号墓出土骨蔵器実測図 ($S=1/3$)

はほぼ垂直な立ち上りをみせる。さらに頸部にかけてはゆるやかに内傾し、明瞭な棱を設けた後、垂直に口縁部に至る。全体としてシャープなプロボーションを有する。色調は暗茶色を呈し焼成はやや甘く軟質である。

② 第2号墓跡より検出された広口壺である。破損が著しく全体の法量は計測できないが、口径部16.8cm、頸部17.4cm、胴部最大径26.0cm、底部13.0cmを測る。器高は現存高で18.7cmを測り、推定で30cm前後と考えられる。外表面はナゲ調整によるが、一部ヘラ調整を行う。内面はナゲ調整を行うが、接合痕を明確に残しており、やや粗い仕上げを行っている。底部は切り離し

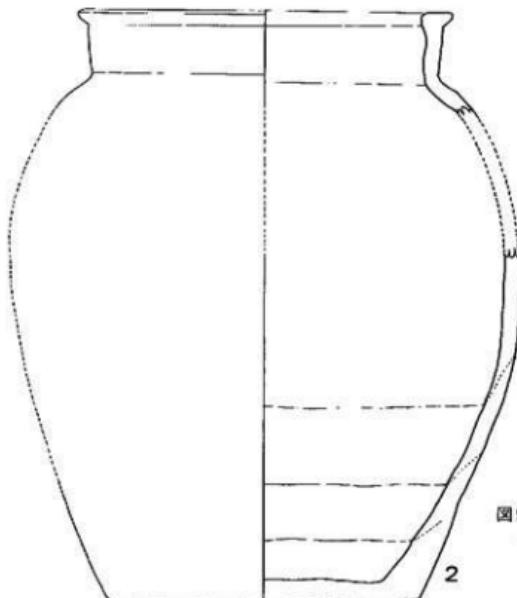


図9 第2号墓出土骨蔵器
実測図 ($S=1/3$)

後、未調整。全体の特徴からみて1とほぼ同様の形態を有するが、外面の刻線文は施されておらず、全体的にシャープさを欠く。また法量からみてもやや大き目である。色調は淡茶色を呈し、焼成はやや甘く軟質である。

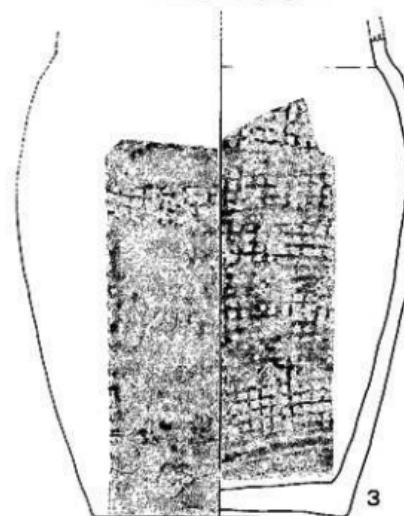


図10 第3号墓出土骨蔵器実測図 ($S=1/3$)

③ 第3号墓跡より検出された。広口壺であろうと推定されるが、口縁部を欠くため明確でない。法量は内径で頸部径16.4cm、胴部最大径20.0cm、底部12.0cmを測る。器高は現存高で25.4cmであり、推定高28~30cm程度と考えられる。外面は全体に格子状の叩きを行なった後ナデ調整を行うが、叩き痕を多く残す。内面は頸部以下全面に格子状叩きを行ない、ナデ調整はなされていない。底部は切り離し後、未調整である。形態は上位に胴部最大径をもち底部から頸部にかけてゆるやかなカーブを描いている。頸部はややしまり明瞭な稜を有し、口縁部にかけてほぼ直立するものと考えられる。色調は深茶色を呈し、焼成は硬質である。

④ 第6号墓跡から検出された素焼きの蓋付短頸瓶である。身の法量は内径で口縁部17.2cm、肩部および胴部最大径25.4cm、底部19.4cm、器高28.8cmを測る。内、外面ともヨコナデ調整を行った後ナデ調整を行う。形態は底部から肩部にかけてほぼ直線で、やや開き気味に立ち上る。肩

部から口縁にかけてはかなり内傾する。色調は暗黄褐色を呈し、焼成はやや甘い。蓋の法量は内径で口縁部21.0cm、肩部19.0cm、器高4.7cm、つまみ径5.0cmである。内、外面ともヨコナデ調整を行うが、外面天井部には1条の沈線文を施す。形態は口縁から肩部にかけて直線的にやや内傾し、大井部は中央にむけてややくぼむ。つまみ部分は中央部が大きく凹み、大井部との接合部で強くしまる。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。これら身と蓋は焼成状態と胎土からみると同一のものではなく、骨蔵器として利用された際に組み合されたものと考えられる。

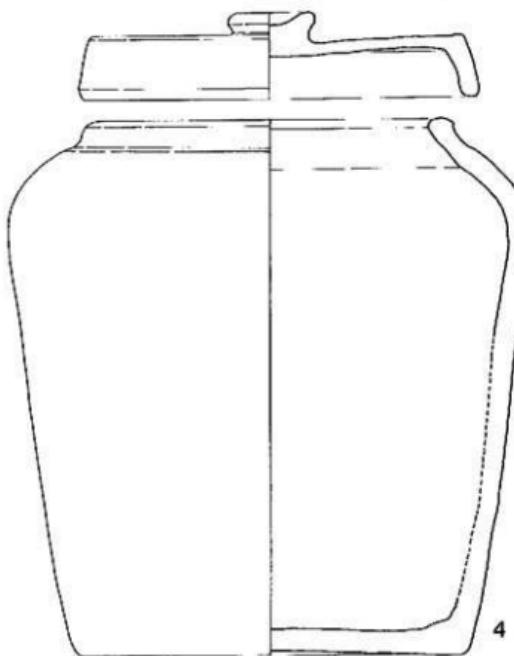


図11 第6号墓出土骨蔵器実測図 (S=1/3)

3) 浅鉢 (第4号墓)

素焼きの浅鉢である。法量は口縁部36.0cm、底部高台14.0cm、器高は11.0cmである。外面はヘ

ラ削りを行ない、一部回転ヘラ削りである。内面は丁寧に研磨がなされており、高台部分はナデ調整であ

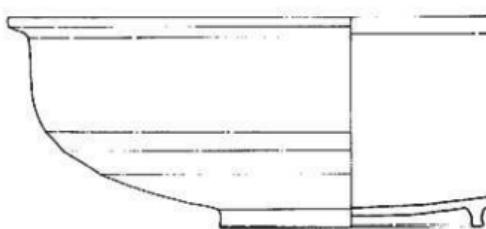


図12 第4号墓出土浅鉢 (S=1/3)

る。形態は底部から胴部中位にかけて大きく膨みながら立ち上り、口縁部にかけてほぼ垂直になる。口縁部はほぼ直角に外へ開き逆L字状を呈する。高台部はやや外へ開く。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや甘い。

4) 深鉢(第5号墓)

素焼きの深鉢である。法量は内径で口縁部36.4cm、胴部最大径35.2cm、底部23.2cm、器高37.9cmを測る。外面は丁寧なヘラ削りを行なうが、底部付近に若干の平行叩き痕を残す。内面および口唇部、底部はヨコナデ調整およびナデ調整を行う。形態は底部から口縁部までやや膨みながらゆるやかなカーブを描き胴部上位に最大径をもつ。口縁部は直角に外へ開き、逆L字状を呈する。製作は粘土紐巻き上げによるため、全体に歪んでおり、底部に対して主軸はややズレる。また口縁部はかなり凸凹がある。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。

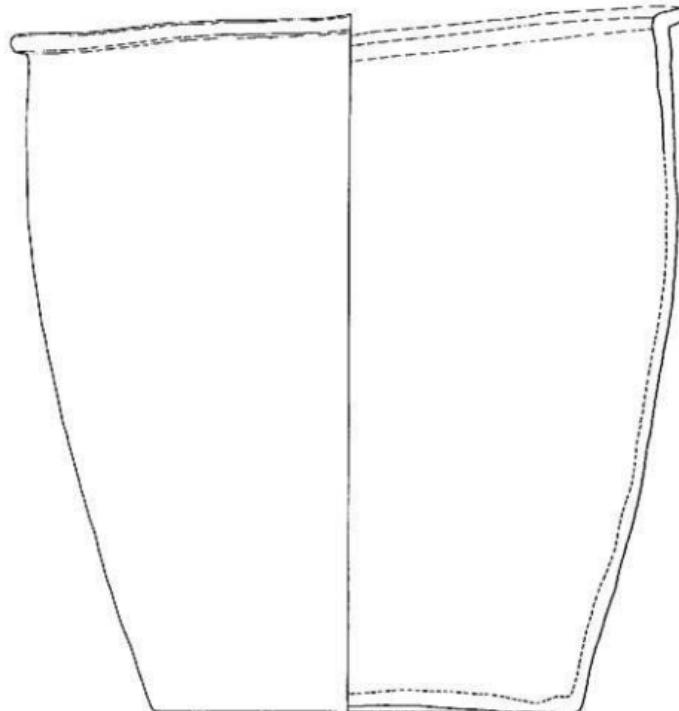


図13 第5号墓出土 深鉢 ($S=1/3$)

5. おわりに

ガラメノ遺跡では古墳1基、墓跡7基、集石遺構4基が確認された。

古墳は後世の搅乱により、その遺存状況は極めて悪かったが、規模については一応推定復元が可能であった。しかし、石室構造などについては全く不明であり、群構成などについても明らかにできなかった。出土遺物は須恵器のみであったが、环身、环蓋については全て同一のヘラ記号（「」）が認められ注目された。このことは本資料が全て同一の窯から供給されたことを示しているが、時期的に近いと思われる伊藤田瓦ヶ迫窯跡では同一のヘラ記号は認められるものの、形態はやや異なる。むしろ形態の特徴は築上郡新吉富村山田3号窯跡出土の資料にその傾向が認められる。つまり、环身底部の立ち上りが受け部付近でやや外溝するものであるが、山田3号窯跡のものについてはそれほど顕著ではない。また法量も山田3号窯跡では口径15cm前後であるに対し、本資料は14cm余りとやや異なり、さらに底部回転ヘラ削りもやや粗雑になっている。のことから本資料についてはこれらよりやや後出する時期（6世紀終末）のものと考えられよう。

墓跡は明確に火葬墓と判断できるのは第1、2、3、6号墓跡であり、いずれも火葬骨が納められていた。第4、5、7号墓跡については火葬骨が伴っておらず断定はできないが、墓の構造や土器からみてほぼ同時期の墓跡として考えることができる。これらは火葬以外の埋葬方法によるものかもしれないが、いずれにしても積極的な根拠に乏しいものである。

骨蔵器は第1、2、3、6号墓跡で検出された。これらは佐賀県立九州陶磁文化館、大橋康二氏の鑑定によれば、第1号墓跡出土の資料については器形及び腹部の刻線の状況、さらに内面にみられる格子状叩き技法の存在などから17世紀中頃（寛永以後）～18世紀前半の時期に唐津地方で生産されたものと思われる。第2、3号墓跡出土の骨蔵器についても若干異なる点はあるものの、ほぼ同様の特徴を有しており、やはり唐津系のものと考えられる。これに対し、第6号墓跡出土の骨蔵器については大阪府堺市向泉寺遺跡出土の渕焼に極似する。この渕焼については大阪京都を中心として奈良を除く近畿地方にその分布が認められるもので、九州では鹿児島県鹿児島城本丸の調査で塙壺が出土している。本資料をもって安易にこの渕焼と結びつけることはできないが、器形や技法など正に同一のものと言うことができる。これらは時期的に17世紀後半～18世紀前半と言われ、第1、2、3号墓跡出土の資料とはほぼ一致するものである。この他第4、5号墓跡から各々浅鉢と深鉢が検出されているが、第5号墓跡の深鉢については渕焼の可能性がある。

火葬人骨については九州大学第2解剖学教室助手、田中良之氏に御助言をいただいたが、資料の状態が悪く、成人骨の可能性が強いものの性別など詳しい点については明確にしえなかつた。

以上の結果から考えて、古墳は6世紀終末の時期が考えられ、市内では数少ない海岸部の立地からみてその背後に存在したであろう集団は、海部に関係するものであった可能性もある。墓跡群については17世紀中頃～18世紀前半の比較的短かい期間に、火葬による埋葬方法を用いた人々

によって利用されたと考えられ、これは伴出した古銭の年代とも一致するものである。さらに分布の状況をみると、第4号墓跡を除き比較的まとまつた在り方を示しており、これ以上の規模は有しなかつたと思われ、第2、3号集石造構にみられる五輪塔などを伴い簡単な集石をもって墓標としていたと考えられる。これらのことから考えれば、被葬者として考えられるのは僧侶などの限られた階層に属する人々であったと思われるが、付近のお寺について行った聞き取り調査ではこれらを明確にすることはできなかった。

近世の墓跡については比較的調査例が少なく、特に大分県下では皆無に近い状況である。その様な中で、本遺跡における近世墓跡の調査は、その墓構造や墓跡群の在り方について、その一端を明らかにしたものと考える。

（注1）小林昭彦他「伊藤田古窯跡群」 大分県教育委員会 1984

（注2）森田勉他「玉水寺」 新古富村教育委員会 1976

（注3）「向泉寺遺跡」 市原市教育委員会 1983

（注4）伴出した古銭は、第2号墓では「寛永通宝」が3枚でいずれも古寛永（1626～1656）であった。第3号墓では銘文が明確でないものの「篆書照寧」（加治木系改造ピタ）に極似するものが1枚得られている。これは大まかに永禄・天正（1558～1591）～寛永12年頃（1635）の鋳造が考えられる。

青山礼志編「貨幣手帳」頬文社 1972

【付論】

ガラヌノ遺跡近世墓の被葬者について

大分県文化課 村 上 久 和

ガラヌノ遺跡の火葬墓群の年代は、骨蔵器及び副葬されていた古銭から江戸時代のものと推定される。さらに細かく時期比定を行なうと、古銭では、1号骨蔵器より出土した「篆書照寧」の加治木系改造ピタ銭が永禄・天正（1558～1591）～寛永12・3年（1635～36）までに加治木銭とともに鋳造されたものである。2号骨蔵器より出土した「寛永通宝」は全て収集界でいう古寛永に属し寛永13年～明暦（1636～1657）の間に鋳造されたものである。

骨蔵器は1～3号が17C前半～18C前半の唐津系の型であり、5・6号が和泉・河内地方で出土する淡焼に近似し、向泉寺V類に比定される。時期は17C中頃～18C中頃に比定されている。以上のことから当火葬墓を含む墓跡群は、1～3が17C前半～中頃に、4～6が17C中頃～18C中頃に形成されたと考えられる。

骨蔵器の出土状態は、1～3・5号墓がほぼ同一レベル上に等間隔に配されており、その周辺に4・6・7号墓跡がとりまいている。1～3号墓跡は、唐津系の骨蔵器を使用しており同一系

統の集団関係を示す墓の可能性がある。また、2・3号集石遺構は、残存状況が悪く明確な性格は不明であるが、五輪塔の出土・遺構の状況などから供養塔などの存在が考えられる。

大分県下では近年、古代・中世の火葬墓・墳墓の調査例は増加しているが、近世墓の実態を考古学的に追求した例はない。九州内においても福岡県唐人山遺跡、同音丸城跡、同辻田地区墓地^(註2)、熊本県林源衛門墓、佐賀県千塔山、同城の上墓、宮崎県宇國都市遺跡などがあり、辻田地区墓地では豪邸墓、学園都市では一部に火葬墓が認められるが、他は全て土葬墓である。これらのことから当遺跡の火葬墓群は九州における江戸初期の墳基群としても特異な存在と考えられる。次に被葬者の性格を位置づけてみたい。

まず、当火葬墓群が立地する小字はガラヌノと称されており、「伽藍野」が転化したものと考えられ、当地が寺域の一部を形成していたと考えられるが、どのような寺の寺域であったかは文献史料・寺伝などは全く認められない。しかしながら当地の北方200mに日蓮宗秋月寺があり、当寺は縁起によると慶長2年(1597)に下池水に建立したが、元文元年(1736)に大新田に遷すであることから、当地域が元文以前の秋月寺の寺域を形成していた可能性は大きい。次に墓地の分布及び種類をみると確実な火葬墓は4基あり、他の墓跡も火葬骨は出土しないものの遺構の状況から火葬墓あるいは再埋葬墓と考えられる。しかしながら再埋葬墓の場合、大形の甕を使用する場合が普遍的であり、民俗例からも県北地域では再埋葬墓は見られない。したがって他の墓跡も火葬墓の可能性が強い。中・近世の村落型墓地は多くの場合、惣墓・郷墓と呼ばれる群集墓の形態を示し、現在でも墓地として利用している場合が多い。また、惣墓・郷墓は、土葬を主体としている点もみのがせない。このように見ていくと当墓地は、墓地の種類・規模などから中・近世の村落型墓地とは大きく相違している。次に火葬墓の築造年代をみると、17C前半～18C前半中頃までの約100年間のみに作られており、秋月寺の成立から大新田移転の間と一致する。このような諸点からみると、当遺跡の火葬墓は、秋月寺の寺僧の墓の可能性が大きい。

以上のように今回のガラヌノ遺跡の近世墓の発見は、陶器に見られる近世初頭の商品流通の一端を示すばかりでなく、近世火葬墓の被葬者の性格づけをも推定する可能性も示した。今後の近世墓地の研究には大きな意義を持つ資料と考えられる。

〈注1〉 岩市文化財調査報告第12集 墓山教育委員会 1983

〈注2〉 九州総貿自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XVIII 福岡県教育委員会 1977

〈注3〉 九州総貿自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIII 福岡県教育委員会 1978

〈注4〉 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第9集 福岡県教育委員会 1978

〈注5〉 「清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓」 熊本県教育委員会 1980

〈注6〉 「千塔山遺跡」 茂山町道路免振調査課 1978

〈注7〉 「城の上遺跡」 城山町教育委員会 1977

〈注8〉 宮崎学園都市清跡発掘調査報告書 宮崎県教育委員会 1983

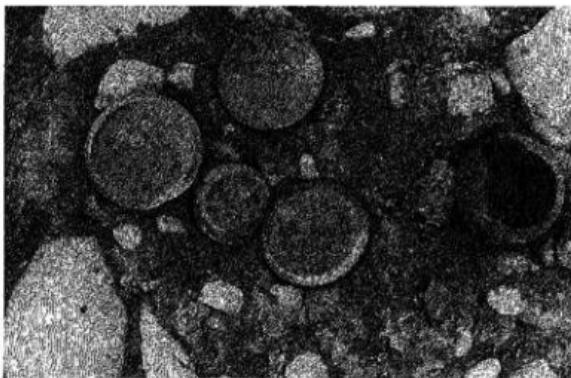
〈注9〉 この典型的な例は、〈注8〉の宮崎学園都市遺跡の墓地である。



調査区全景



古墳検出状況



古墳
須恵器出土状況

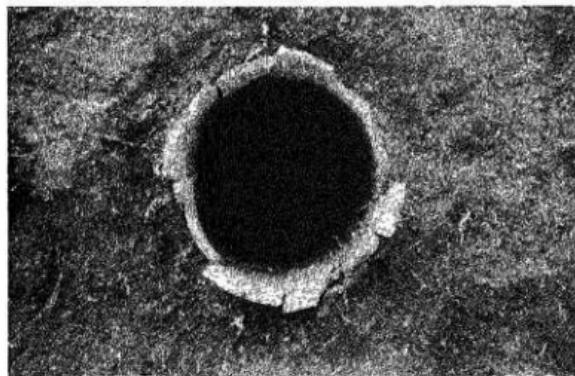
〔図版 1〕



第3号墓
骨藏器出土状况



第4号墓
浅鉢出土状况

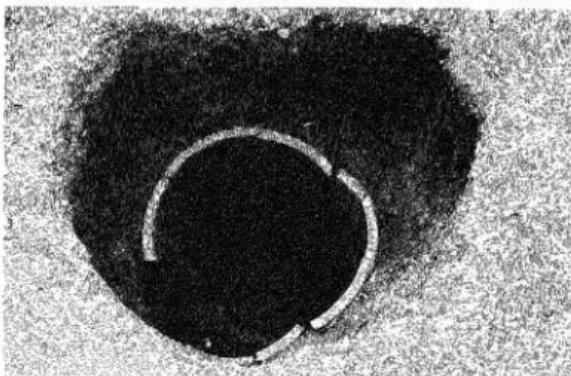


第6号墓
骨藏器出土状况

〔图版2〕



第5号墓
上部施設検出状況

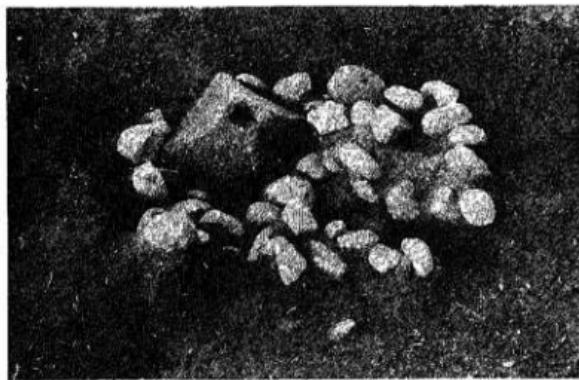


第5号墓
深鉢出土状況

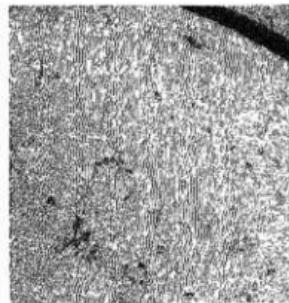


第2号集石造構
検出状況

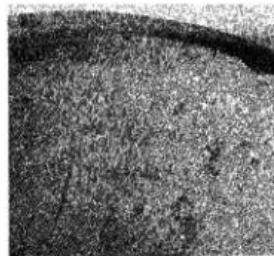
〔図版3〕



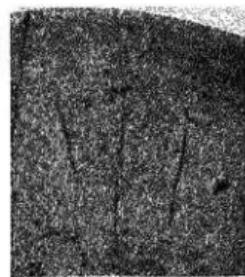
第3号集石遺構
検出状況



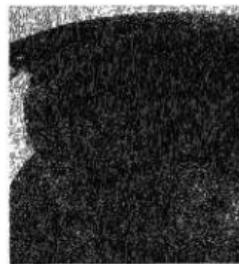
2



3



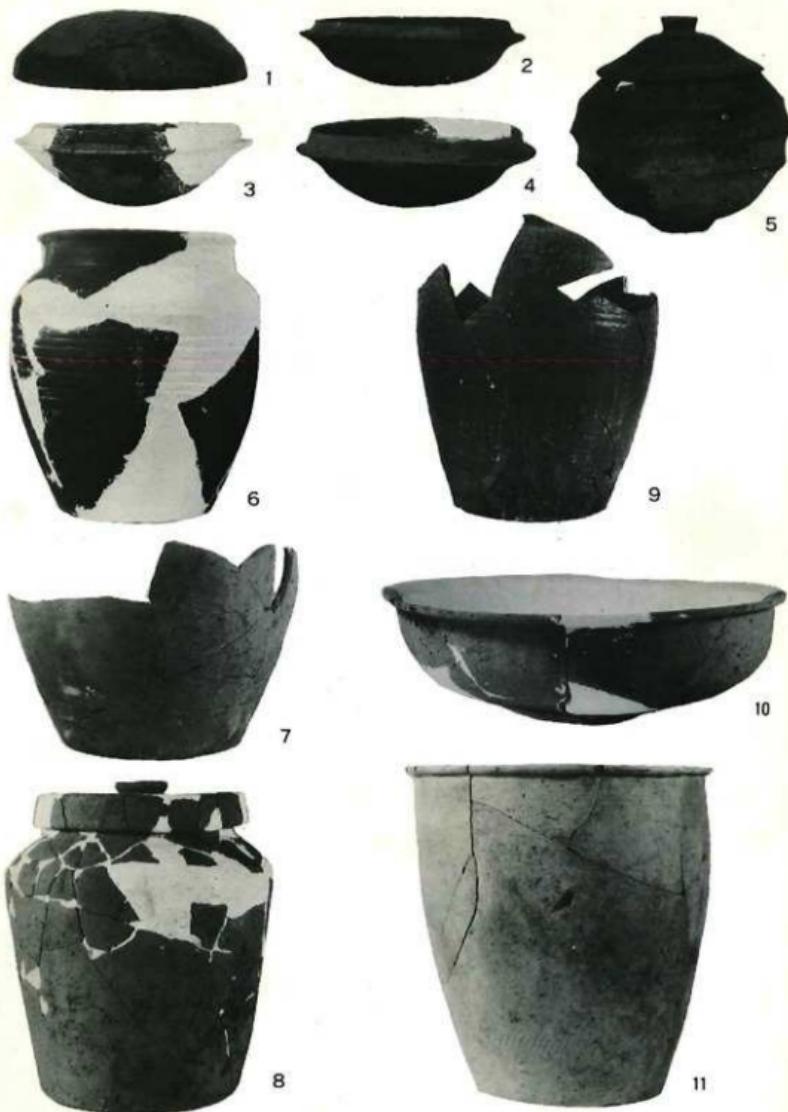
1



4

古墳出土須恵器
ヘラ記号近影

〔図版4〕



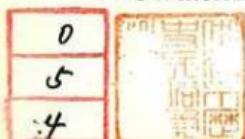
1～5 古墳内出土須恵器

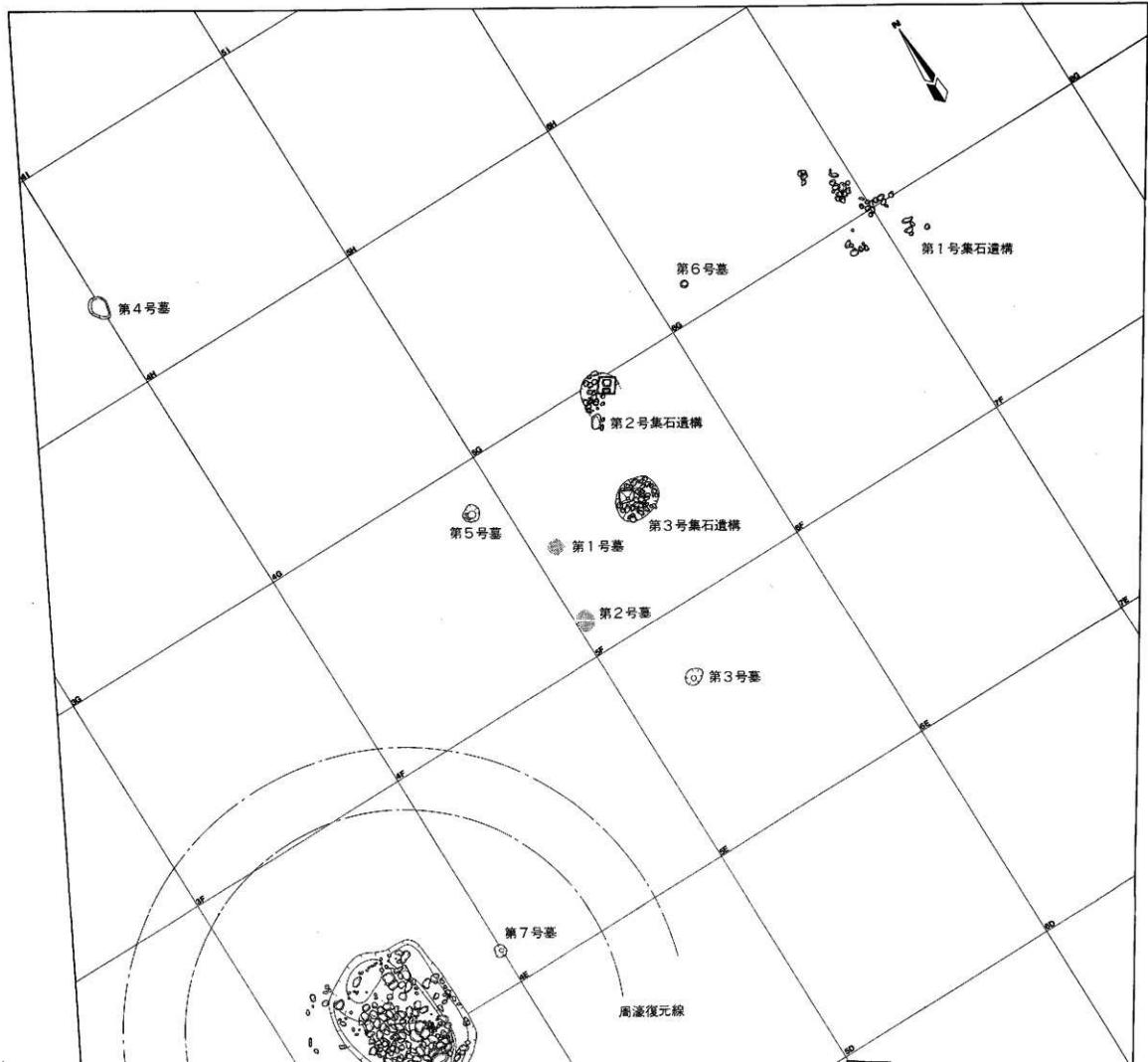
6～9 墓跡出土骨蔵器

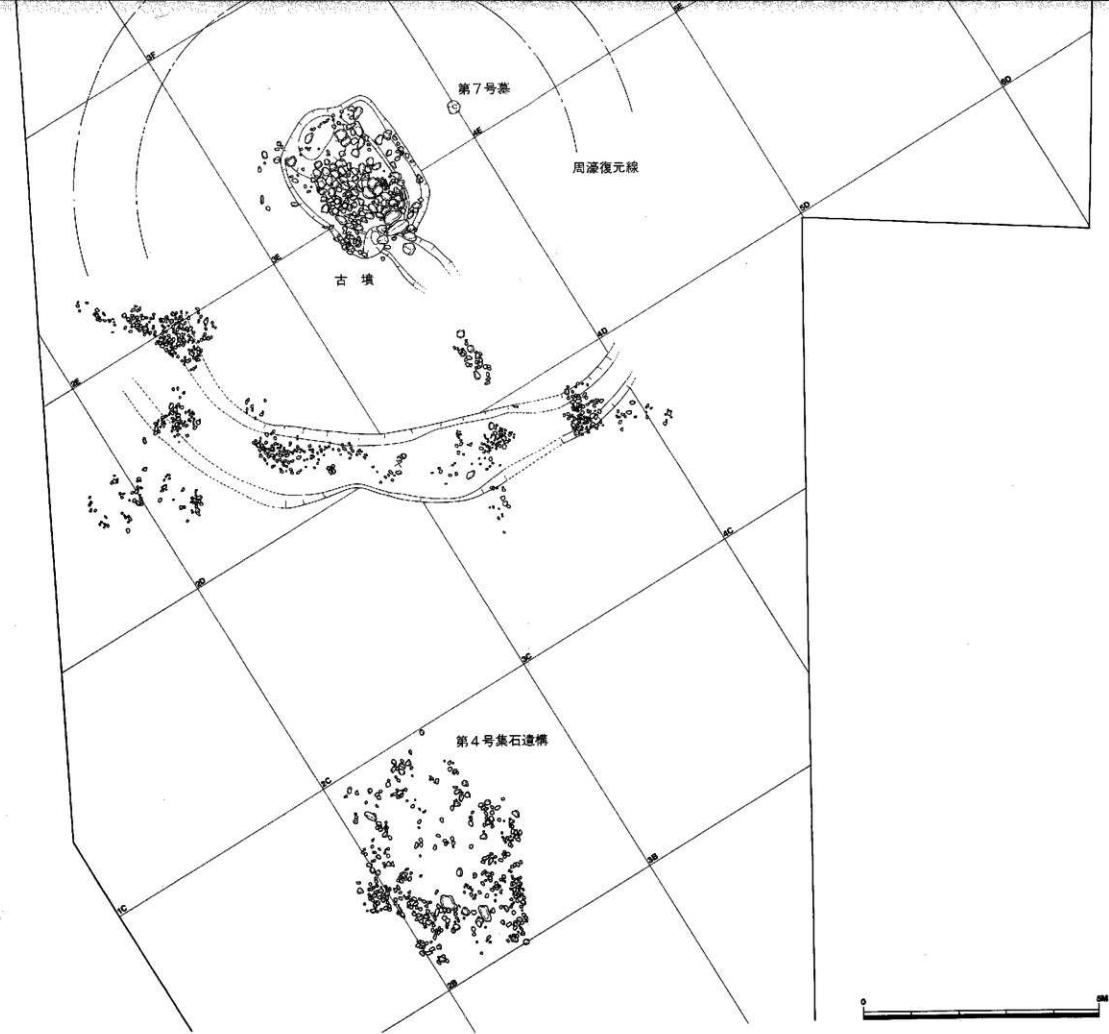
10 墓跡出土浅鉢

11 墓跡出土深鉢

(図版5)







別図 ガラヌノ遺跡 遺構配置図

ガラスノ道
中津市文化財譲呈報告書

昭和60年 6月1日

上工：小林洋介（新日本ガラス）

中津市文化財課（中津市）

口述：山本正一（新日本ガラス）

整理：山本正一（新日本ガラス）